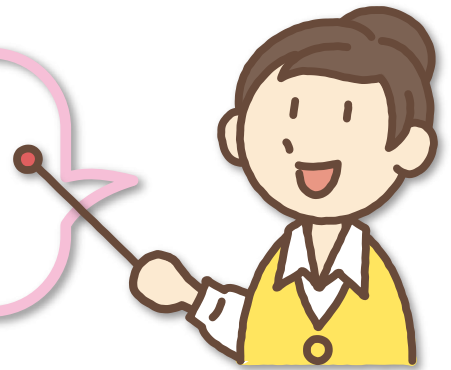


7 財務書類でわかる藤沢市の財政状況

ここからは、少し見方を変えて、藤沢市の財政状況を「財務書類」からながめてみましょう。

「財務書類」とは、民間企業などで「財務諸表」、「財務4表」と呼ばれている決算書類を、市が地方公会計制度に基づいて作成したものです。



1 財務書類ってどんなもの？

地方自治体の決算書では、現金の収支に重点を置いているため、土地・建物等の資産、建物等の老朽化に伴う価値の減少、借金の残高や引当金などの見えない負債はわかりません。これらを明らかにしたものが財務書類です。

財務書類は、①どのような資産をどのくらい持っているかなどがわかる**貸借対照表**、②純資産が前年度に比べ、どのように変動したかがわかる**純資産変動計算書**、③行政サービスにどれだけ費用がかかっているかなどがわかる**行政コスト計算書**、④現金の変動がわかる**資金収支計算書**の4つで構成されています。

Q 財務書類はどのような考え方で作っているの？

A

財務書類は、次の考え方を基にして作成しています。

- ①複式簿記・発生主義…お金のやり取りの原因となる事実が発生した日を基準にするので、これからの支払いや受け取りの予定が決まっている収入の状況などが明らかになります。
- ②固定資産台帳の作成…市が所有している資産の一覧を固定資産台帳として作成することで、市の財産をより正確に把握することができます。



Q 市はこれからどのようなことをしていくの？

A

財務書類を毎年作成し、過去の状況や他自治体との比較・分析などを進めていきます。

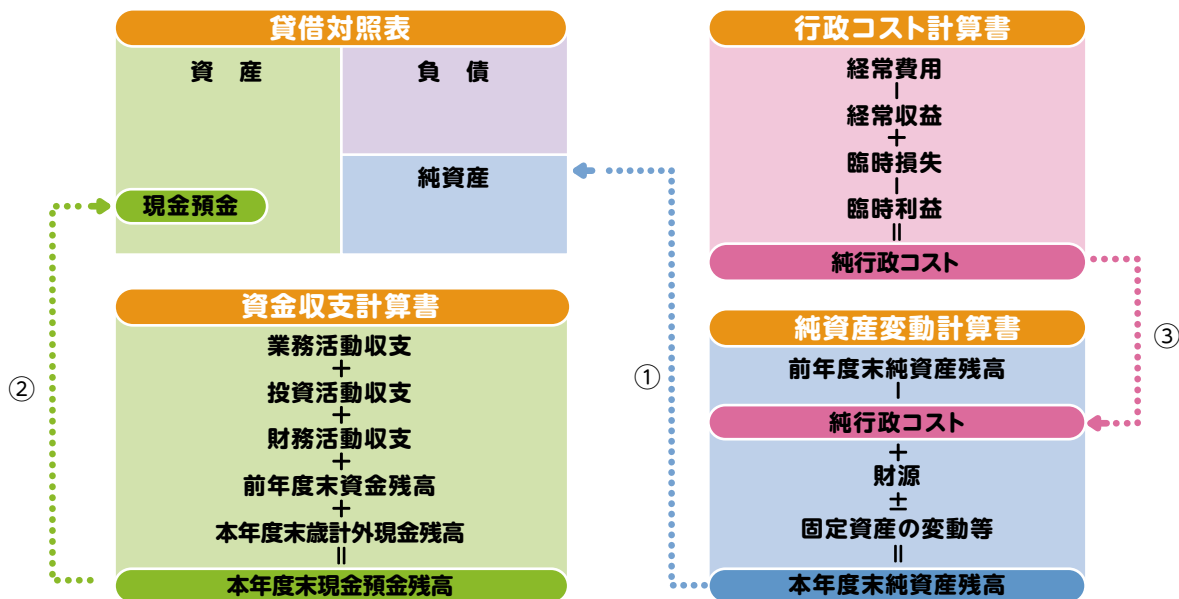
また、事業別や施設別の財務書類を作成することや、市の財政状況や施策の情報をよりわかりやすく説明することで、将来的には公共施設の老朽化対策、予算編成などにも活用することができるようにしていきます。



Q 4つの財務書類の関係は？

A 図にすると、財務書類はそれぞれが密接に関係し、整合性が図られていることがわかります。

●財務書類の相関関係



- ①貸借対照表の純資産は純資産変動計算書の本年度末残高と一致します。
- ②貸借対照表の現金預金は資金収支計算書の本年度末残高と一致します。
- ③行政コスト計算書の純行政コストは純資産変動計算書のそれと一致します。

Q 市の会計はいろいろな種類があるけど、財務書類はどの範囲で作るの？

A 一般会計のほか、様々な特別会計や関連団体の財務書類を次の分類で作成します。

- ・ **一般会計等**…一般会計及び地方公営事業会計以外の特別会計が対象
- ・ **全体財務書類**…一般会計等に地方公営事業会計を加えたもの
- ・ **連結財務書類**…全体財務書類に関連団体を加えたもの

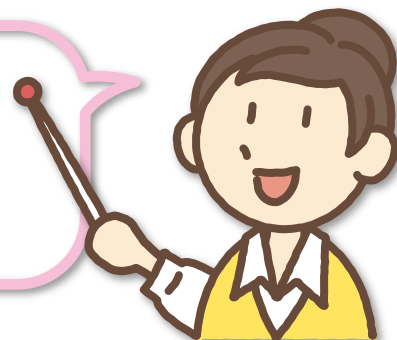
藤沢市の場合、次のとおりです。

一般会計等	一般会計	
	特別会計 (地方公営事業会計以外)	北部第二(三地区)土地区画整理事業費特別会計 墓園事業費特別会計
全体財務書類	特別会計 (地方公営事業会計)	国民健康保険事業費特別会計 湘南台駐車場事業費特別会計 介護保険事業費特別会計 後期高齢者医療事業費特別会計 下水道事業費特別会計 市民病院事業会計
連結財務書類	関連団体	公益財団法人湘南産業振興財団 公益財団法人藤沢市保健医療財団 公益財団法人藤沢市まちづくり協会 公益財団法人藤沢市みらい創造財団 一般財団法人藤沢市開発経営公社 株式会社藤沢市興業公社 藤沢市民会館サービス・センター株式会社 藤沢市土地開発公社 社会福祉法人藤沢市社会福祉協議会 神奈川県後期高齢者医療広域連合

次のページから
一般会計等の財務書類を使って、
もう少し詳しく説明していきます。

2 藤沢市にはどのくらいの資産があるの？ ～貸借対照表～

貸借対照表をみれば、資産、負債、純資産の額が一目でわかります。
 貸借対照表の左側(借方)には資産が、右側(貸方)の上部には資産の取得のために借り入れた借金などの負債が、右側(貸方)の下部には、借金以外の資産取得の財源である純資産がそれぞれ表示されます。
 貸借対照表は、必ず「資産=負債+純資産」という関係になります。



● 令和3年度 貸借対照表(一般会計等)

令和4年3月31日現在

資産の部では、市が持っている学校や道路などの資産の価値をお金で表しています。

負債の部は、市債償還金など、将来お金が出ていくことを表しているもので、将来世代の負担といえます。

借 方		貸 方	
【資産の部】		【負債の部】	
学校、図書館等の土地、建物、工作物など	固定資産 8,991.8億円	固定負債 925.1億円	償還予定が1年を超える市債など
道路等の土地、建物、工作物など	有形固定資産 8,439.4億円	地方債 723.9億円	債務負担行為で確定債務とみなされるもの
100万円以上の備品など	● 事業用資産 4,838.2億円	長期未払金 1.3億円	全職員が年度末に自己都合退職した場合の退職手当の額
ソフトウェア、地上権など	● インフラ資産 3,517.8億円	退職手当引当金 173.3億円	借り入れた市債などのうち翌年度の償還予定額
下水道など企業会計や関連団体などへの出資金	● 物品 83.4億円	その他 26.6億円	債務負担行為のうち、翌年度の支払予定額
1年を超えて回収されない債権	● 無形固定資産 3.5億円	流動負債 115.9億円	翌年度支払予定額のうち本年度分
特定の目的の基金の残高	● 投資その他の資産 548.9億円	1年以内償還予定地方債 94.3億円	還付予定の市税など
回収が見込まれない部分	● 投資及び出資金 455.5億円	未払金 0.7億円	これまでの世代が形成した固定資産等
国・県の補助金や市税等の収入未済額のうち本年度に発生した分	● 長期延滞債権 17.5億円	賞与等引当金 15.7億円	純資産-固定資産等形成成分。詳しくは27ページで説明します。
財政調整基金の残高	● 基金 76.8億円	預り金 2.6億円	
	● その他 0.6億円	その他 2.6億円	
	● 徴収不能引当金 △1.5億円	負債合計 1,041.0億円	
	流動資産 259.8億円	純資産の部	
	現金預金 76.6億円	固定資産等形成成分 9,115.4億円	
	● 未収金 59.8億円	余剰分(不足分) △904.8億円	
	● 基金 123.6億円	純資産合計 8,210.6億円	
	● 徴収不能引当金 △0.2億円	負債・純資産合計 9,251.6億円	
	資産合計 9,251.6億円		

△表示はマイナスを表します。

負債の部と純資産の部は、資産をどのように手に入れたのかを財源ごとに一覧にしたものです。

純資産の部は、市税や国・県からの補助金などを表しており、現在までの世代の負担といえます。

資産は約9,252億円で、うち約91%が建物や道路などの有形固定資産です。

資産に対する負債の割合は約11%ですので、藤沢市の資産はこれまでの世代の負担(純資産)によって築かれたものが大部分であることがわかります。

3 純資産ってどういうもの？ ～純資産変動計算書～

26ページの貸借対照表のとおり、純資産は資産から負債を除いた金額で、純資産変動計算書は純資産額が前年度末(期首)に比べ、どのように変動したかを示したものです。

純資産は、資産を取得した財源の内訳のうち、負債以外の「将来返済する必要がないもの」であることから、市税や国・県からの補助金などが財源になります。

本年度末純資産残高を見ると、余剰分(不足分)がマイナスになっており、これまでの資産形成に市税や国・県等補助金だけでなく、市債も活用しているということがわかります。

マイナスが大きいことは好ましいことではありませんが、16ページのとおり、市債は世代間の公平性を保つための役割を持っていますので、多くの自治体で「余剰分(不足分)」はマイナスになります。



● 令和3年度 純資産変動計算書(一般会計等)

令和3年4月1日～令和4年3月31日

	純資産合計	固定資産等 形成分	余剰分 (不足分)
前年度末純資産残高	8,154.3億円	9,067.5億円	△913.2億円
純行政コスト(△)	△1,472.8億円	-	△1,472.8億円
財源	1,525.6億円	-	1,525.6億円
● 税収等	965.0億円	-	965.0億円
● 国県等補助金	560.6億円	-	560.6億円
本年度差額	52.8億円	-	52.8億円
● 固定資産等の変動(内部変動)	-	44.4億円	△44.4億円
● 有形固定資産等の増加	-	160.5億円	△160.5億円
● 有形固定資産等の減少	-	△105.0億円	105.0億円
● 貸付金・基金等の増加	-	71.7億円	△71.7億円
● 貸付金・基金等の減少	-	△82.8億円	82.8億円
● 資産評価差額	-	-	-
● 無償所管換等	3.5億円	3.5億円	-
● その他	-	-	-
本年度純資産変動額	56.3億円	47.9億円	8.4億円
本年度末純資産残高	8,210.6億円	9,115.4億円	△904.8億円

前年度と本年度の未収金を加味した市税、寄附金など

前年度と本年度の未収金を加味した国・県からの補助金、負担金など

純資産のうち、有形固定資産、貸付金・基金などの増減に充てられた分を表す

有価証券等の資産評価額の増減

無償で譲渡又は取得した固定資産の評価額など

行政コスト計算書の純行政コストの額と一致

△表示はマイナスを表します。

貸借対照表の純資産の額と一致

貸借対照表の固定資産と、流動資産のうち短期貸付金と基金の合計

純資産総額と固定資産等形成分の差額

令和3年度内に得られた財源から純行政コストを差し引いた本年度差額は、約52.8億円で、無償所管換等の増減なども合わせると本年度純資産変動額は約56.3億円となり、前年度から資産が増えたことがわかります。

4 行政サービスにはどのくらいの費用がかかっているの？ ～行政コスト計算書～

ごみの収集や福祉サービスの提供など直接資産の形成に結びつかない行政サービスにどれだけ費用(コスト)がかかり、それをどのような収入でまかなったかを表すものが行政コスト計算書です。



● 令和3年度 行政コスト計算書(一般会計等)

令和3年4月1日～令和4年3月31日

	金額	構成比率
経常費用 ①	1,542.3億円	100.0%
業務費用	830.4億円	53.9%
人件費	277.1億円	18.0%
職員給与費	227.5億円	14.8%
賞与等引当金繰入額	15.7億円	1.0%
退職手当引当金繰入額	5.6億円	0.4%
その他	28.3億円	1.8%
物件費等	542.9億円	35.2%
物件費	412.0億円	26.7%
維持補修費	35.1億円	2.3%
減価償却費	95.8億円	6.2%
その他	0.0億円	0.0%
その他の業務費用	10.4億円	0.7%
支払利息	2.9億円	0.2%
徴収不能引当金繰入額	0.0億円	0.0%
その他	7.5億円	0.5%
移転費用	711.9億円	46.1%
補助金等	288.3億円	18.7%
社会保障給付	324.3億円	21.0%
他会計への繰出金	88.0億円	5.7%
その他	11.3億円	0.7%
経常収益 ②	69.3億円	
純経常行政コスト ③ (① - ②)	1,473.0億円	
臨時損失 ④	2.1億円	
臨時利益 ⑤	2.3億円	
純行政コスト ③ + ④ - ⑤	1,472.8億円	

本年度に発生した翌年度に支給される期末手当等の見込額

本年度に想定する将来支給される退職手当の見込額

消耗品費や委託料などのうち資産計上されないもの

施設の老朽化などにより補修を行った経費

耐用年数に基づいて計算された建物・工作物などの価値減少分

市債の支払利息

団体や個人に支払う補助金や負担金など

一般会計等から地方公営事業会計への繰出金

保育園、市営住宅の使用料や住民票の交付手数料など

資産の売却損益など、臨時的な損益

コスト全体から、使用料など行政サービスを利用した人の負担額、臨時損失、臨時利益を差し引いた額を示しています。

差引の純行政コスト約1,472.8億円は、市税などの一般財源や国・県からの補助金などでまかっています。

5 資産のうち、現金の動きは？ ～資金収支計算書～

貸借対照表の左側(借方)、資産の部に計上されている現金をその支出の性質から3つに分けて、現金の変動を表すものが、資金収支計算書です。

資金収支計算書は、引当金や減価償却費などの現金でない支出を含まないことから、ほかの財務書類と違い、現金のみの表示となっており、市の決算書に一番近い財務書類といえます。



● 令和3年度 資金収支計算書(一般会計等)

令和3年4月1日～令和4年3月31日

	業務活動収支	
	業務支出	1,447.7億円
さまざまな業務を行うにあたって支出した金額	● 業務費用支出	735.8億円
	人件費支出	285.2億円
	物件費等支出	440.7億円
	● 支払利息支出	2.9億円
	その他の支出	7.0億円
市債の利息の支払いに要した金額	移転費用支出	711.9億円
	● 補助金等支出	288.3億円
団体や個人に支払った補助金や負担金など	社会保障給付支出	324.3億円
	● 他会計への繰出支出	88.0億円
一般会計等から特別会計への繰出金	その他の支出	11.3億円
	● 業務収入	1,553.2億円
市税、国県等補助金などの収入	税収等収入	965.5億円
	国県等補助金収入	520.1億円
	使用料及び手数料収入	36.9億円
	その他の収入	30.7億円
災害復旧などに要した金額	● 臨時支出	0.0億円
	● 臨時収入	0.0億円
災害復旧に関する補助金などの収入	合計(収入-支出)	105.5億円 ①
公共施設等の整備、基金の積立てなどに要した支出	投資活動収支	
	● 投資活動支出	232.2億円
	● 投資活動収入	121.2億円
国県等補助金、基金の取り崩し、資産の売却などの収入	合計(収入-支出)	△111.0億円 ②
	財務活動収支	
市債の償還などに要した支出	● 財務活動支出	96.8億円
	● 財務活動収入	115.0億円
市債の発行などの収入	合計(収入-支出)	18.2億円 ③
	● 本年度資金収支額	12.7億円 ④
業務活動収支、投資活動収支、財務活動収支の合計額	前年度末資金残高	60.4億円 ⑤
	本年度末資金残高	73.1億円 ⑥
	本年度末歳計外現金残高	3.5億円
	本年度末現金預金残高	76.6億円



△表示はマイナスを表します。

① + ② + ③ = ④ 投資活動収支は赤字となっており、その赤字分を業務活動収支と財務活動収支の黒字分で補っていることがわかります。

④ + ⑤ = ⑥ 本年度の収支は黒字となっており、前年度末からさらに黒字が増えたことがわかります。




6 財務書類を分析すると

民間企業では、経営状態をわかりやすく説明するためなどにさまざまな指標を公開しています。

財務書類でも分析の指標が示されていますので、一般会計等の数値で算出したものをいくつか紹介します。

この指標は国で定めたものですので、他自治体とも比較することができます。



	指標名／計算式	数 値	説 明
資産形成度	 市民1人当たり資産額 208万8,000円 資産額÷住民基本台帳人口	R3 2,088,155円 R2 2,090,177円 類似団体平均 1,558,000円	市民1人当たりの額にすることにより、実感しやすい情報となるとともに、人口規模が異なる他の団体との比較ができるようになります。
	有形固定資産減価償却率 (減価償却累計額÷償却資産取得価額) ×100	R3 56.1% R2 55.2% 類似団体平均 59.9%	耐用年数に対して資産の取得からどの程度経過しているのかを把握することができます。
世代間公平性	純資産比率 (純資産額÷資産額)×100	R3 88.7% R2 88.8% 類似団体平均 78.9%	資産額に対する純資産額の割合をみることににより、基本的な財務健全性を見ることができます。 また、資産額のうち、これまでの世代が負担してきた額の割合がわかります。
	 市民1人当たり負債額 23万5,000円 負債額÷住民基本台帳人口	R3 234,978円 R2 234,460円 類似団体平均 329,000円	市民1人当たりの額にすることにより、実感しやすい情報となるとともに、人口規模が異なる他の団体との比較ができるようになります。
効率性	 市民1人当たり行政コスト 33万2,000円 純行政コスト÷住民基本台帳人口	R3 332,419円 R2 407,065円 類似団体平均 425,000円	市民1人当たりの額にすることにより、実感しやすい情報となるとともに、人口規模が異なる他の団体との比較ができるようになります。
弾力性	行政コスト対税収等比率 (純経常行政コスト÷(税収等+補助金等受入)) ×100	R3 96.6% R2 96.9%	純経常行政コストに対する税収等の比率をみることににより、行政コストがどれだけ本年度の負担でまかなわれたかを把握することができます。100%に近づくほど資産形成の余裕度が低いといえます。
	受益者負担の割合 (経常収益÷経常費用)×100	R3 4.5% R2 3.4% 類似団体平均 3.5%	行政サービスの提供に対する利用者負担の割合を算出することができます。

※注1:指標は円単位で算出しています。

※注2:類似団体平均の金額は、総務省が公表した「統一的な基準による財務書類に関する情報(概要)(令和2年度)」の指標を掲載しています。

ここまで「一般会計等」の財務書類について説明してきました。

ここで紹介しきれなかった指標や、財務書類の補足説明資料である「附属明細書」、「注記」、地方公営事業会計などを加えた「全会計」、さらに関連団体を加えた「連結会計」の財務書類は、財政課のホームページ「財務書類について」のページでご覧いただくことができます。